日記「少数意見」

ー日本映画編ー

JUN

2001年11月16日(金)　千と千尋の神隠し

「千と千尋」が大当たりした理由はそのエロティシズムにある。宮崎駿がロリコンだという人がいるが、私はその方面はよくわからないのでここでは立ち入らない。いずれにせよ、「千と千尋は大衆的な支持を得たのであるから、そのエロティシズムは大衆が受け入れることのできる性格のものだったはずだ。

そもそも、舞台となる湯屋は江戸時代には売春が行われていた場所である。湯女ーと映画名の中で呼んでいたーは売春婦だった。映画の中で湯屋に来る異形の神様はどうも皆男性のようだった。彼らは派手なイルミネーションのついた船で大挙してやってくる。

萩野千尋は、親がサラ金で借金を作り家計が苦しかったこともあり、学資くらい自分で稼ごうと不思議の街歌舞伎町にやってきた。あるお店に「ここで働かせてください！」と言って入ったところ、女主人に「千」という源氏名を与えられて働くことになった。千は皆が嫌がる汚い客（オクサレサマ）にも一生懸命奉仕し感謝され、店の売れっ子になっていった。ストーカーのような客（カオナシ）もいて、金を積んで千を誘惑しようとしたが、千は「私のほしいものはあなたには絶対にだせない！」と言ってはねつけた。女主人にこき使われているハンサムなボーイさん（ハク）との恋もあった。やがてお金をためた千は風俗を引退し不思議の街を後にした。千尋が不思議の街で働いていたことは外の世界の人は誰も知らず、千尋にとっても夢の中の出来事のように思える。

そう、「千と千尋」は風俗嬢の物語だったのだ。この映画が海外でどう受け入れられるかには興味がある。

2001年12月10日(月)　５回目の千と千尋

土曜日の４時の回。半分くらいの入りか。７月２０日公開で５ヶ月続いているのですごいことだ。

私は７月３０日、８月１４と２３、１０月１１日の４回見ているが、ひとつの映画を５回見るのは初めてだ。そろそろ冷静に見られればと思ったが、案に反して、別の映画の予告編をやっているときから感動の予感で目が潤む始末。したがってこの映画を客観的に評価する立場にはない。

これまではストーリーの展開に注意が向き、緻密な構成（特にメインテーマと並行して進行するカオナシの物語の組み合わせの妙）に感心していたが、今回は映像をじっくり見ることが出来た。あらためて映画が動く絵であることを実感した。一つ一つのフレームが絵として完成していて、場面場面に対応したスピードで流れていく。瞬時に通り過ぎていく無数の絵を巻き戻して見たいと思う。DVDを買わなくては・・・。今一番見たい場面は、最初にハクが現れるところで、急に夕闇が迫り油屋の灯りが点灯するところ。ここのスピード感はスゴイ！観客はここで異界の時間流に入っていく。

ほかにも取り上げたい場面はいくつもあるが、個々の名場面の集積が名画になるわけではない。私がこの作品が特別だと思うのは、神の手を感じるからだ。三島由起夫は「英霊の声」を書いたとき母親に「手が勝手に動いてしまう」と言ったそうだが「千と千尋」にもこのような神秘的な力を感じてしまう。民族の集合的無意識が顕在化したというか、日本人が他文化を取り込みながらら醸成してきた文化がここに結実した感がある。これは「源氏物語」や「モナリザ」の誕生に比肩しうる芸術史上の大事件なのかもしれない。それをリアルタイムで体験できる幸せを満喫している。

2001年12月22日(土)　光の雨

連合赤軍のリンチ殺人事件を映画製作現場とダブらせて描いたもので、秀作だった。製作者の意図としては、集団の中で弱い人間同士が虚勢をはり、殺られるまえに殺る、という図式で殺戮が繰り返されていった集団の狂気を、現代に通じるものとして描きたかったのであろう。私も見ているときは殺される側に共感していた。しかし、見終わってしばらくたつと、殺す側にも理由があるように思えてきた。

私は弁護士になって２年目にアメリカに留学したが、留学中に日本の事務所の若い女性秘書が自殺した。私は彼女が古手の秘書たちにいじめられていたことを知っていたので、それが原因だと思った。日本からの情報でその確信を強めた私は、事務所にあてて便箋２６枚の手紙を出した。そこで私は、仕事にかこつけたいじめとそれを許していた事務所の体質を糾弾した。その手紙は握りつぶされ、所員が読むことはなかった。

職場でのいじめは必ずと言っていいほど仕事を理由になされ、それは「光の雨」における反革命的態度を理由として課される自己批判と似ている。３０年前の私は、「仕事」がいじめる側の自己正当化のために使われていると思った。しかし、経営者になってみると、必ずしもそうではないと考えるようになった。

「影武者」のメーキングのビデオの中に、黒澤明が顔を真っ赤にして唇を震わせながら怒鳴って

いるところがある。すごい迫力だった。完全主義者である黒澤が、いいかげんな仕事をする人間を許せない気持が今ではよくわかる。私は黒澤のように怒れないので、一人でファイルを床に叩きつけたりしている。私が古手の秘書のいじめとみたものも、そのような怒りだったのかもしれない。昨今の風潮は、いじめに厳しく、怠け者にやさしい社会を作り出しているいるように思える。

権力と死闘を繰り返していた連合赤軍において、革命を純粋に信じる指導者が、やる気のない仲間に対して殺意を抱いたとしても不思議はない。それを肯定的に描く映画を誰か作らないものか。

2002年2月18日(月)　千と千尋

ベルリン国際映画祭金熊賞。期待はしていたが、あまりにも日本的な作品なので難しいと思っていた。審査員の目はたいしたものだ。

この作品は国際的な理解を得ることはまったく考えず、宮崎駿が自分の内的世界をストレートに表現したもので、外国の審査員に何が評価されたのか興味がある。

「千と千尋」はキネマ旬報の２００１年度日本映画ベスト・テンで３位に入っている。５８人の選考委員が１位を１０点、１０位を１点として採点する。「GO」が３３６点、「ハッシュ！」が２６５点で「千と千尋」が２４２点。たしかに「GO」は秀作だが「千と千尋」と比べれば前頭と横綱の違いがある。「千と千尋」に１０点を入れた者が７人、１０位までに入れなかった者が２５人。実に半数近くが点を入れていない。なにを考えているんだろう。趣味が合わないことはあっても昨年公開された日本映画の中で１０位に入らないということは考えられない。

ちなみに、「羅生門」は１９５０年の５位、「７人の侍」は１９５４年の３位。これは今から考えたらお笑いでしょう。予言するが２１世紀の世界の映画のベスト・テンで「千と千尋」は上位に入る。この結果は２１０１年に発表されます。

2002年4月2日(火)　黒い家

大竹しのぶが熱演しているホラー。ネタバレあり。

最初に目を奪われるのは大竹の夫の異常な動きだ。頭を絶えず上下に動かし、自分の身体をコントロールできないため洗車の際自分にホースで水をかけてしまう。神経症的な動きだが、森田監督はこの動きで精神の異常を表現しようとしているようだ。

この映画には異常な動きをする人間が他にも出てくる。主人公若槻の大学の助教授金石（犯罪心理学専門）はやたらと身体をくねらす。金石の遺体を見せるために若槻を案内する警察の人は右半身が不自由なようだった。

若槻自身水を叩きつけるようなクロールで周囲に迷惑をかける。若槻の部屋のプリンターに「みずしぶき、たてすぎ」という文章が打ち出されるのは（誰からのメッセージか不明）森田監督が若槻の泳法に特別な意味を与えていたことを示している。

この中で大竹しのぶは目つきがおかしいほかはいたって正常だ。何回かボーリング場のシーンが出てくるが、彼女はきれいなフォームでストライクを連発する。彼女は身体を完全にコントロールしている人間として描かれる。しかし、彼女が大量殺人の犯人なのだ。

森田監督はなにを言いたかったのでであろうか。うがった見方だが、森田監督には大竹の視点、すなわち正常な身体の人間が病的な身体の人間に対して感じる嫌悪感、に共鳴するところがあったのではないか。ナチスが犯罪者や精神異常者を抹殺したのは有名な話で、今の世の中でそれを支持する人はいないが、人の心理の奥底にはそれを是認するなにかがあるのではないか。あなたは電車の中で変な動きをする人がいた場合、その人から遠ざかろうとするのではないか。このように考えると、この映画は我々の中に潜むホラーに光を当てることをもくろんでいるように思える。

2002年5月24日(金)　KT

面白かった。

１９７３年のKCIAによる金大中拉致事件の話だが、自衛隊の情報将校富田満洲男（佐藤浩市）を絡ませたところが作品に奥行きを与えた。富田は三島由起夫と自衛隊の決起を計画したが、上層部の反対で断念したという。三島が自決したとき富田は東部方面総監部に白い菊の花をもって現れる。

金大中事件は日本を舞台にしたということを除いて、日本と直接関係ない。この映画に富田というフィクショナルな人物が出てこなかったら日本人の観客が感情移入できる度合いは低くなっていただろう。

富田が三島のシンパであったという設定も有効だった。この当時、朴大統領の軍事独裁政権と民主化の旗手であった金大中の対立は朝鮮半島の緊張を背景に、殺すか殺されるかの状況になっていた。そこに存在感をもって関われる日本人は少なかっただろう。１９７０年に死んだ三島はその当時すでに平和ボケしていた日本人に「生命以上の価値は存在するか」という問いを投かけた。死に場所をもとめているかのような富田の暗い表情は、軍隊になれない自衛隊のみならず、あの時代の一部の青年に共通するものだった。アラブに死に場所を求めた赤軍派の連中と１８０度政治思想は違っていても同じ情念を持つ富田のような自衛官はきっといたのだろう。

失敗したら死が待っているという緊張感の中で行動するKCIAと、どう動いても死が近づいてこないぬるま湯のような日本の状況に苦悩する富田は、互いに次元の違う世界にいるように交われない。

最後の場面で、愛する女と静かな人生を送ろうと決意した富田は唐突な死に遭遇する。これが三島作品の主人公であれば、英雄であることを捨てた男に訪れる当然の最期ということになるのだが、阪本順治監督の意図はそうではなかったのだろう。

2002年6月3日(月)　突入せよ！「あさま山荘」事件

つまらなかった。

原田監督の技量というより、あの事件そのものがつまらない事件だったのだ。私も当時テレビにくぎづけになっていた一人だが、それは結末がわからなっかたからだ。分かってみればどうっていうことはない。

歴史的にみても、すでに勝敗がついている試合の駄目押しの１点のようなものだし、あの直前にあった榛名山のリンチ殺人のように凄絶な人間ドラマがあったわけでもない。だから原田監督は警視庁と長野県警の主導権争いに焦点を絞ったが、この争いも会社の部門間の争いのようでミミッチイ。正義とか真実とかの高い次元の争いではなく、単なる縄張り争いだ。その中で役所広司演ずる佐々がカッコよく立ちまわる。しかし彼も能吏という以上誉めようがないつまらない人間だ。

要するに、馬鹿な田舎の役人と中央から来た外国帰りのエリート（それを鼻にかけているイヤミな）の低次元な争いの物語で、これが日本だと言われれば納得しないでもない。

2002年8月1日(木)　ピンポン

昨日渋谷のシネマライズで観た。窪塚洋介主演のスポコンもの。

観客は若者ばかりで、階段に座るほどの盛況。多分私が最年長だが、気持が若いから気にならない。開演まで列で待っていたとき後ろにいたのが高校生らしき男の子２人連れで、窪塚のファンのようであった。「GO」のときの窪塚のヘアスタイルがよかったというような話をしていたが、こういう映画ファンがいると心強い。

映画はよかったが、どうも「少林サッカー」と比べてしまう。そうするとまだ真面目過ぎるな、と思ってしまう。もっと笑わせたいんだろうな、というところが多かった。お馬鹿な映画というのは意外と難しい。

2002年8月5日(月)　東京マリーゴールド

田中麗奈扮するエリカが合コンで知り合った男と恋に落ちる。しかし、その男には１年の予定でアメリカに留学中の恋人マユミがいる。男はエリカと肉体関係になる前にこのことを説明し、マユミが帰ってきたら別れなければならないという。それでも、男を好きになってしまったエリカはその条件を呑む。

これを契約と考えれば、男は隠すところなく自分の置かれた情況をエリカに説明しており、エリカの側に何の誤解もない。でも、この男に好感をもたない人は多いだろう。どうしてか。男は先ず自分の保身を考えている。エリカが自分に惚れていることを奇貨として、自分に都合のよい条件を押し付けているようにみえる。生身の女であるエリカを苛酷な契約で縛り、それを望んだのはエリカなのだといえる立場を確保してから行動している。

実は昔この男と同じようなこと（期間限定恋愛）をやったことがあるので、身につまされる思いがした。今でも、このような場合どう対応すればいいのか分からない。勿論、男はマユミに忠実であるべきだというのが模範回答だろうが、田中麗奈のようないい女が現れてもその気持ちは変わらないか。

2002年9月9日(月)　リターナー

最初は「ターミネーター」や「ET」の亜流かなと思いながら観ていたが、やがて、この映画はハリウッドの大作をなぞりながら全く別の世界を描いていることが分かってきた。それは多分ジャパニメーションに特有の、無機質な未来社会の精密な描写と土俗的な情念が激しく絡み合う、なつかしい世界だ。私はこの分野に詳しくないが、「風の谷のナウシカ」と同質のものを感じた。

山崎貴監督はVFX出身の３８才とのことだが、アニメ文化の中で育った世代である。昨日のテレビ朝日で「アニメ・特撮ヒーロー＆ヒロインベスト１００」をやっていたが、ここ３０年くらいの間に日本はこの種のサブカルチャーで独自の世界を築き上げてきた。いまその文化がCGの力を借りて実写の世界にも進出し始めたのかもしれない。

金城武と鈴木杏は「探偵物語」の松田優作と薬師丸ひろ子のように息が合っていた。

唯一欠点があるとすれば、敵役の岸谷五郎率いる中国マフィアのチャチサで、こんな連中が地球を滅亡に導いたというのは説得力がない。アメリカ映画だったら、CIAとかNSAとか、国家の表または裏の機関もしくはテロリスト集団が出てくるところだが、日本にはいずれもそぐわない。
結局、日本で一番こわいのは中国人マフィアということになるのか。

2002年10月1日(火)　千年女優

昨日渋谷で観たが、すばらしい作品だった。観客は少なくもったいない。

三島由起夫の「豊穣の海」と似ていると思った。「豊穣の海」は（すごーく簡単に言うと）純粋な情熱に突き動かされて２０才に満たない人生を終え、そして転生する若者たちの８０年に及ぶ物語だ。「千年女優」は７０才になる往年の大女優、藤原千代子、のインタビューとして構成されている。しかし、映像は千代子の出演作に応じて王朝時代から未来までの１０００年を映し出す。千代子が少女時代にめぐり会った革命家の青年との淡い初恋と別離は異なった時代を舞台に何回も再現される。それは、ひとつの純粋な情熱が転生により異なった個体で違う形で発現されるのに似ている。

人生の経験をそれなりに重ねてきた者としては、千代子のさまざまな時代を背景にした恋が自らの過去の思い出とオーバーラップする。ノスタルジーとナルチシズムに酔っている私に千代子の最後のセリフが聞こえてくる。

「でも、私はあの人を追いかける自分がすきなんだもん」

監督！それを言っちゃお終いよ！

2002年10月3日(木)　千年女優ー補足

一昨日書いたものの最後の部分が分かりにくかったので一言。

行動する人は、その求める対象との関係で自分がより小さく無に近くなるほど美しくなるのだ。千代子は初恋の彼のために死ねると思ったとき一番美しく輝く。でも彼女が輝いている自分の美しさに気づいてしまうと、その美しさは一瞬にして失われる。手のひらの上の雪の結晶のように。

2002年10月22日(火)　DOLLS

ネタバレあり。

北野監督の作品は全部観ていて、その殆どを劇場で観た。だから北野ファンと言えるのかもしれないが、最近の作品は嫌いで、映画祭の外国人審査員におもねった感じがいやだった。今回も文楽をテーマにするというので、またあれか、と思ったが観にいった。

社長の娘との結婚式場で松本は婚約者であった女性が自殺を図り精神に異常をきたして入院していることを友人から聞かされる。彼は会場を抜け出して病院に向かい、結婚式は流れた。ここで私はなんと無責任なと思った。しかし、この映画は責任などというものを超えた世界を描いていることにやがて私は気づかされた。

松本は彼女を連れ出して放浪の旅にでる。美しい自然を背景に赤い紐でつながれた二人はひたすらどこへという当てもなく歩きつづける。

ここである評者は「ディスカバー・ジャパン以外のなにものでもいない」という。「HANABI」の自然描写については私もそう思った。しかし、「DOLLS」の映像の美しさには必然性があるように感じた。二人が歩いている世界はすでに現実ではなく、狂気の描く世界で、やがて死が全てを終わらせることを美が予告しているのだ。

文楽の背景となった世界と違い、障害のない現代において本当の恋は描けないのではないかと私は考えていた。それは障害の存在によって極限まで高められたエネルギーが狂気のような恋に結実するという物語が作れないということだ。でも恋が狂気であり、それが美しいのであれば、観客をその最も美しいところへ途中を省略して連れていってもいいのではないか。北野監督はそう考えたのではないか。

この作品の三つのエピソードは常識に縛られている人間には理解できないだろう。たとえば深田恭子が扮する人気歌手のおっかけ男の話。彼は歌手が事故で怪我をして引退したとき、彼女の美しい姿を永遠に脳裏にとどめるため自らの目をつぶす。目が見えないと言う理由で他のファンには許されない歌手との再会を彼は果たす。彼が歌手に手を引かれてバラの花園を散策する場面はあまりにも美しい。この、いわゆる絵葉書のような美しさは、花園が現実でないことを示している。ここでは非現実的な美が必要だったのだ。

三つのエピソードの恋に北野監督は理由をつけない。なぜ恋をしたかは本来あまり意味のないことなのだ。理由はなんであれ、狂気のレベルに達した恋をカメラは正面から捉えていく。そして美しすぎる自然の描写が、恋のはげしさを伝える。これは映画にしか出来ないことかもしれない。

2002年11月5日(火)　狂気の桜

白い戦闘服の３人の若者が渋谷の街を走り抜け、不良共を叩きのめす姿は爽快だ。映像もアーティスティックで日本の伝統的な様式美の中に渋谷と「ナショナリスト」たちを捉えている。

しかし、爽快感は最初だけで、３人は既成右翼の抗争にまき込まれていく。

窪塚を追いかける女（ふけた女子高生）が登場する。彼女が、バスの中で赤ん坊を抱いた女性に席を譲ろうとしない男に対して、今の日本人は腐っていると憤慨する場面がある。彼女は「そのような」悪を正すことを窪塚に期待する。この作品の不毛はここに象徴されている。

窪塚たちには倒すべき敵がいないのだ。だから彼らの暴力はそれ自体が目的になり、やがて自らを傷つけ破滅していく。なぜなら、バスの中で席を譲らない男は彼ら自身であり（勿論この行為はもろもろの小さな欺瞞、保身の象徴だ）、そのような悪を成敗するためには、先ず自らを切り裂くことが求められるからだ。

2002年12月20日(金)　AIKIと気

交通事故で下半身不随になって自暴自棄の生活を送っていた青年（加藤晴彦）が合気柔術と出会い立ち直る。

楽しめる映画だったが、私が特に注目したのは合気柔術の師範（石橋凌）が空手家５人を一瞬のうちに倒す場面だ。石橋は相手の手を軽くつかむだけで転倒させ動けなくさせる。大東流合気柔術六万会が監修しているから出来ないことではないのだろう。

私は西野流呼吸法を１２年やっているが（西野流についてはエッセイを見てください）、この映画の柔術は私の知っている「気」を使っているようだ。いわゆる合気道（もっともスティーブン・セガールのしか見たことがないが）は相手の力を利用するのではないか。映画の技は相手が力を入れていなくてもかかるようだ。

一度西野皓三が同じような技を使うのを見た。西野は指導員に自分の手首をつかむように言った。西野がつかまれた手を軽くひねると指導員は鉄棒競技のように西野の手を軸にして一回転して床にたたきつけられた。だから映画のような技があることは疑わないが、疑問なのはそれが空手家に効くのかということだ。

私が知る限り西野皓三といえど、気の回っていない人を飛ばすことは出来ない。普通は道場に通って２，３ヶ月しないと飛ばない。気に敏感な人（特に子供）はすぐ飛ぶことがあるが、そうでないと一般の人相手の武術としては使えない。武道家は一般の人に比べて気に敏感であるといわれているが、皆そうだとは思えない。そう考えると、あの映画の描写はちょっとウソっぽい。

誰か気だけを武器にする武道大会を開いてくれないものか。ルールは相手に触れることなく倒すこと。もっとも、ドラゴンボールのようにカメハメ波が見えるわけではないので、見ている方にはさっぱり面白くないだろうが。

2003年2月1日(土)　刑務所の中

漫画家花輪和一が銃砲刀剣類等不法所持、火薬類取締法違反で懲役３年の実刑判決を受け日高刑務所に入った実話に基づく映画。原作の漫画は以前読んで面白いと思った。原作のある映画は先に原作を読んでしまうとつまらなく感じることが多いのであまり期待していなかった。

ところが、実に面白かったのだ。漫画を読み返してみたが、ほとんどのエピソードが漫画の中

にあったしセリフも同じものが多かった。それでいて映画には漫画にはない味があった。山崎努をはじめに俳優がうまかったということはあるが、それだけでは漫画を超えられない。

多分それは映画にあって漫画にないもの、動きと音ではないか。

刑務所では何をするにも許可が必要だ。花輪が作業場で消しゴムを落としたとき、彼は手を上げて「願いまーす！」と大声をあげる。それを認めた刑務官は派手な動きで花輪を指差し太い声で「はい！」と叫ぶ。すべてが大げさで絵になる。運動場までの行進の「いちにいちに」や天突き体操の「よおいしょー」の掛け声、作業場から便所に行くときの小走りの動き、作業を始める前の手こすり、いずれも理屈なしに面白い。

漫画で印象的だった刑務所の食事は映画でも力を入れて描かれていた。刑務所では食事が一番の楽しみで、それが美味いのだ。正月はとくにご馳走がでる。漫画でもそうだったが映画も食堂のメニューのように料理を映し出す。あじのフライなど、とてもおいしそうだった。花輪と別の部屋の囚人原山との運動場での会話。「ご飯にしょうゆをかけると美味しいね」「そうだね」「ソースをかけても美味しいよ」「今度やってみよう」には何かほのぼのとした気分になり家でやってみようかと思ったが結局やらなかった。多分シャバでは美味くないに違いない。

いわゆる力作ではなく、このような自然体の映画を国際映画祭に出すべきではないかと思った。もっとも、世界には日本の刑務所が天国に見える国が沢山あるから、それを目当てに外国から人が来るのも困ったことだろう。

2003年2月17日(月)　たそがれ清兵衛

２００２年度キネマ旬報日本映画ベスト・テンで３４５ポイントを取り圧倒的な差（2位の「刑務所の中」は１９９ポイント）で１位になった山田洋次監督作品。

幕末の小藩の平侍井口清兵衛は内職をしなければ生活できないほど貧乏で、思いを寄せる親友の妹朋江を嫁にとることも出来ない。そんな清兵衛も昔は有名道場の師範代をしていた剣の達人で、その腕を見込まれて藩から反対派の侍余吾善衛門を討つよう命ぜられる。

力作ではあるが、色々と納得できないところがあった。

・親友さえも清兵衛の剣の腕前を知らないのは不自然だ。後で観客をビックリさせるつもりなのだろうが、ストーリーの真実らしさが失われる。

・剣の能力を使えば貧乏をすることはなかったのではないか。趣味で貧乏をしているように見える。

・なぜ清兵衛は剣の能力を隠していたのか。並外れた能力を持つ人間が正体を隠して生きるには、それなりの理由がなければおかしい。謙虚な人だと言いたいのかもしれないが、過剰な謙虚さはイヤミになる。

・余吾を討ちに行く前、清兵衛は朋江に思いを打ち明けるが、なぜこのタイミングなのか。死ぬことを前提にしているのなら、朋江に哀しみを残すことになる。勝って禄が上がることを期待しての口説きなら打算的だ。いずれにしても男らしくない。

・余吾を討つのに藩は一人づつ討手を差し向ける以外に手段はなかったのか。なぜ多勢で討たないのか。余吾の名誉に配慮した対応に見えるが、そのような説明はなかった。

・藩はなぜ清兵衛を選んだのか。昔師範代をしていたとしても、長いこと剣から離れていた人間を選ばざるを得ないほど人材がなかったのか。

・余吾は、裏山を越えて逃げたいと言い、清兵衛はそれを助けようとした。しかし、本気で逃げるなら討手が来る前に一人で逃げればよかったではないか。見張りもいなかったようだし。

・清兵衛は余吾が斬りかかってきたとき、すぐには小太刀を抜かず説得しようとした。これは剣豪である相手に失礼ではないか。清兵衛というより監督の偽善を感じる。

・清兵衛は余吾の刀が鴨居に刺さったのを見てから胴を払った。これでは素手の人間を斬ったことになる。この場面は「椿三十郎」の三船と仲代の対決のように余吾が刀を振り下ろした瞬間に清兵衛が胴を払えばよかった。そのあと余吾の手が刀を離れるが刀は宙に浮いたままになる。そしてカメラが鴨居に刺さっている刀を捉える。

映像はきれいで真田広之、宮沢りえなどの演技はよかった。問題は脚本だ。この手の話は運命の力を観客に印象付けることが大事だ。多くの選択肢の中から最も苛酷なものを選ばざるを得ないところに悲劇の美がある。山田洋次の脚本にはそのような厳しさがない。

黒澤明のように、優秀な脚本家と共同で批判し合いながら本を書けば上記のよういな欠点は少なくなったろう。そのためには製作会社が脚本に金と時間をかける必要がある。

2003年3月7日(金)　黄泉がえり

ネタバレあり。いつもそうですが。

「害虫」（これも傑作）の塩田明彦監督作品。

熊本のある限られた地域で死者が復活するという現象が多発する。死者は、超常的な力により、最もその人を愛していた人の元に帰ってくる。

このような思念の物質化による死者の復活は「火星年代記」（レイ・ブラッドベリ）や「惑星ソラリス」（スタニスラフ・レム）で扱われ、いわばSFの定番だが、この作品は群像劇としていくつもの喜びと哀しみを感動的に描く。死者はつかの間の再会の後消えていく。

私は、いじめで自殺した中学生の男子がひそかに彼に思いを寄せていた同級生の女子の元に復活するエピソードが一番好きだった。多分見る人によって感動する対象が違うだろう。私にとって中学校の３年間は特別な時間だった。夢が現実に阻まれる前の最期の期間だったような気がする。学校のグラウンドで再び別れが来ることを知りながらみつめあう二人の姿に感動した。私にそのようなことがあった訳ではなく、ノスタルジーが具体的な形を持っているということではないが、純粋でありえた時間がそこにあったという感慨がある。

2003年5月12日(月)　七人の侍

ご存知の通り、黒澤明の名作で百姓が侍を雇って野武士から村を守る話である。DVDを買ったので観ていたら不思議なことに気づいた。

クライマックスの雨中の合戦で野武士は全部退治されるはずだった。最後に残ったのは野武士の頭で菊千代（三船敏郎）に殺される。しかし、その前の場面は、その頭が手下を一人連れて農家に押し入るというもので、追いかけてきた菊千代に押し出されるように手下は裏口から後ずさりしながら出てくる。残された頭が菊千代に殺られるのだが、手下についてはなにも語られない。次の場面は、勝四郎（木村功）が「野武士は！野武士は！」と叫ぶのに対して勘兵衛（志村喬）が「野武士はもういない」と答える。手下はどうしたのだろう。

2003年8月16日(土)　バトル・ロワイアル　II　鎮魂歌

この映画を監督したのはほとんどが息子の健太だが、映画の文体は正に欣ニのものだった。

深作欣ニ作品の重要なテーマのひとつは権力との闘争だと思うが、この映画はそれを最もストレートな形で出している。

「すべてのオトナに、宣戦布告」というのがこの映画のコピーだが、すぐに大人になってしまう連中がこのようなことを言うのはおかしいと批判する人がいる。しかしコドモとオトナは何も年齢だけで分けるものではない。ここでいうオトナは権力の座に坐って、保身に汲々として、変革を恐れるヤカラのことだ。その意味では深作欣二は７２才のコドモだった。

深作欣二監督作品は「仁義なき戦い」シリーズのほか何本か観ているが、殺し合いを描くのが好きな人だ。多分描くだけでなく自分でやってみたかったんだろう。

私はこの映画の戦闘シーンを観ていて、自分も一度あのような状況に遭遇してみたいと思った。いわゆる戦争映画を観ていてそのように思うことはないが、普通の中学生が突然戦場に置かれるという設定が刺激的だったのだろう。

今の日本で戦争を経験しているのは８０才以上の老人の一部でしかない。戦争は人類の有史以来の営みであって、たぶんこれだけ長い期間戦争を経験したことのない国は世界を見渡してもあまりないのではないか。人間として生をうけて戦争を一度も経験しないで死ぬのはなにか重要なものを見逃してしまうような気がする。戦争がたのしいものだとは思わないが、今日の日本のような生ぬるい世界しか見ないで人生を終えてしまうのは本当に生きたといえるのだろうか。

戦争でなくてもいい。命をやり取りするような状況を経験してみたい。身体がちゃんと動くうちにそのようなチャンスがあるだろうか。三島由起夫のように自分で状況を作り出す能力もエネルギーもないから無理だろうな。

2003年9月30日(火)　座頭市

北野監督作品は全部（ほとんどを劇場で）観ているが、この作品はダントツに面白い。彼が本当に撮りたい映画ではなかったのかもしれないが、案外制約があったほうが才能は生きるものだ。

北野作品ではメッセージがうるさく感じられることがあるが、この作品ではそれが薄められ、それでいて映画の文体は桎梏をはね返そうとしているかのごとく強力だ。

敵の屋敷への斬り込みが高倉健のヤクザ映画のようだと思ったが、何か違った。座頭市にはヤクザ映画のヒーローのような情念がなく、殺人機械のように斬っていく。悪役だった頃の「ターミネーター」のようだ。

北野映画の登場人物は前触れなく突然行動に移る。行動に移る前の迷いや煩悶は存在しないかのごとく。北野作品で一番こわかった暴力シーンは、「３-４Ｘ１０月」で喫茶店の店長（ガダルカナル・タカ）が「トイレが臭い」などと言いながらさんざめいている女子大生の顔を突然重いガラスの灰皿で殴りつけるところで、これは本物だと思った。

さて、「座頭市」ははなやかな集団タップダンスで締めくくられるが、ここで不覚にも泣いてしまった。それまでは時代考証もしっかりしていた（ように見えた）のに突然のタップだ。でもそれがとても自然で、表現が（元気のいい魚のように）自分の力で与えられた容器から飛び出してしまったかのようだった。日本文化とはそもそもそのように混沌としたものなのだろう。

その場面から思い出したのは黒澤明の「夢」の「水車のある村」で、笠智衆演ずる老人の妻の葬式に楽隊が出てくるところだ。あんな辺鄙な村にトランペット、トロンボーン、フルート、チューバと西洋の楽器をそろえた楽隊がいるのはおかしいが、そんな疑問は吹き飛んでしまうように素晴らしいシーンだった。

黒澤は北野に「日本映画をたのむ」と言ったそうだが、タップダンスの場面を観て北野は黒澤の正統な継承者だと感じた。なにか日本文化の燃えるトーチが黒澤から北野に渡されるところを見たような気がした。そして涙がとまらなくなった。

2003年10月18日(土)　「２８日後・・・」と「ドラゴンヘッド」

何れもカタストロフィを描いた作品だが印象は大いに違う。

「２８日後・・・」はダニー・ボイル監督のイギリス映画で、ウィルスによって人類（少なくとも英国）が絶滅に瀕する話だ。ウィルスは人格を破壊し、人間の攻撃性を極限にまで高め、血を介して伝染する。感染した人は１０秒で発狂し攻撃してくるので、その前に殺さなければならない。

とにかく不快な映画で、良く出来ていたのでかえって観たあとの気分は最悪だった。楽観的と悲観的の二つのエンディングが上映されていたが、エンディングなどはどうでもいいから早く終わってくれと思った。

生き延びるためには親友でも肉親でも殺すというのもいやだったが、ウィルスによって信頼していた人間が突然怪物になり攻撃してくるのは怖かった。子供の頃、仲良く遊んでいたはずのグループの中で気がつくと自分が一人攻撃の対象になっていることを発見したときの恐怖を思い出した。

ウィルスに感染した者を殺し、感染していない者同士殺し合い、最後に何人か生き残るが、残った連中が正義というわけではなく、カタルシスがない。

「ドラゴンヘッド」は有名な漫画の映画化で、富士山の大噴火、大地震等で日本が形を変えてしまうほど破壊されてしまう。「２８日後・・・」に匹敵する災害だが人々の反応は違っている。

町ぐるみの集団自殺を企てる人々、恐怖を感じないように前頭葉を切除された子供、そして東京の地下の巨大な避難所には恐怖を感じなくする薬によって人格を失った多くの人々が無表情に何事もなかったかのように生活している。

思うに、恐怖と攻撃は相互に原因となり結果となり、恐怖が攻撃という反応を引き出し、攻撃が恐怖をもたらす。それが無限に続いていく。「２８日後・・・」の中に２８日前に狂気が発生したのではなく、その２８日前も、またその２８日前も人間はずっと殺し合っていた、という趣旨のセリフがあったが、人間の本質を言い当てたものだろう。

「ドラゴンヘッド」にも恐怖に攻撃で対抗しようとする人々は登場する。しかし、多くは恐怖を見ないようにする。「２８日後・・・」と「ドラゴンヘッド」では災害の性格が違うから一概には言えないが、「ドラゴンヘッド」の描く日本人は世界の中では特異ではないか。日本人には自然災害に対するあきらめに似た畏敬の気持があるといわれるが、戦争のような人的な破壊に対しても同様な感情があるのではないか。たとえば、アメリカで一時大流行した核シェルターは日本では話題にもならなかった。

「ドラゴンヘッド」は好きな作品だ。原作と比べて物足りないとする批評はあるが、よくあれだけの映像を作れたと思う。とにかく大災害の中でも人間のやさしさが残っているのがいい。日本的な甘さかもしれないが。

2004年2月19日(木)　ジョゼと虎と魚たち

ちょっと軽いイケメンの大学生（恒夫）が身障者の女性（ジョゼ）と恋をするはなし。

良く出来た映画で、役者の演技も上手だったが、観ていて疲れた。身障者の恋ということにとらわれて普通の恋愛もののように楽しめなかった。

何故だか考えた。先ず、一般的な恋愛についてみると、この年になると純愛なんていうものがないことは分かってくる。本人が自覚しているか否かにかかわらず、恋心の基底には現実的な欲望がある。それは、金や、名誉や、セックスであるかもしれないし、恋する側の空虚感だったりする。恋の真っ只中にいると分からないが、後で冷静に考えてみるとスタートラインはそんなものだ。

では身障者との恋愛はこれとどのように違うのだろう。ふつう身障者がよほど大金持ちか有名人でもなければ、身障者との恋愛はある負担をしょい込むことになる。それは普通の恋愛が何らかのプラスの要素を獲得しようとするのと違っている。ここで頭に浮かぶのは善とか愛（それもアガペ）という言葉で、それに対してはえらいなーと思う反面偽善の臭いも感じる。他人（世間）から「いい人」と思われたいのか、又は自己陶酔しているだけではないか。

映画の中でジョゼは、隣に住んでいるエロおやじの話をする。その男はジョゼに胸を触らせてくれればゴミを出してやると言う。ジョゼはその取引に応じた。それをなじる恒夫にジョゼはあなたはどこが違うのと問う。

また考えてみよう。ジョゼがかわいそうという理由で結婚を申し込む男とジョゼの胸を触りたいからゴミだしを手伝う男とどちらをジョゼは好むだろう。何れも取引だと考えると、前者はマイナス（障害）でプラス（結婚）を買うことで、後者はプラス（胸）でプラス（ゴミだし）を買うということだ。多分ジョゼはマイナスを売り物にしたくないだろう。それは屈辱だから。

この映画で恒夫はジョゼに何を求めていたかは判然としない。それは健常者間の恋愛と異ならないものだったかもしれないし、恒夫の恋人がいみじくも言っていたようにジョゼは障害を武器に恒夫を奪ったのかもしれない。

自分が恒夫だったらどう行動しただろう。どのようにすれば本当に誠実だといえるのだろう。などと考えていたらとてもくたびれた。

2004年5月14日(金)　花とアリス

岩井俊二監督の高校生ラブコメディ。

イケ面のボーとした先輩をめぐり時には協力し時には競い合う花（鈴木杏）とアリス（蒼井優）

。この二人の演技のレベルは非常に高い。

岩井監督作品の中でも肩の力が抜けていて気楽に楽しめる。唯一気に入らないのは、アリスが芸能界に入っていくというところ。牧歌的なメルヘンが現実世界に接して汚されるような気がする。

2004年7月5日(月)　下妻物語

茨城県下妻を舞台にしたロリータ（深田恭子）とヤンキー（土屋アンナ）の友情物語。

日本映画には、国際映画祭に招待されない、ヤクザものとかスケバンものを含む大量の娯楽作品がある。それらのカリカチュアが「キル・ビル１」だったが、外国人の監督に先を越されたのが残念であった。この映画はタランティーノにも観てもらい傑作で、日本映画の底力を感じさせる。

この作品のひとつの見所は、二人のファッション対決で、桃子（深田）のロココにイチゴ（土屋）のレディース（暴走族）ファッションは引けを取らない。これは言わば文化の対決で、特攻服のユニフォームに凝った刺繍をするような反社会的集団は日本以外いないのではないか。昔の学園紛争の時代の色とりどりのヘルメットも他国にはない現象だった。

2004年7月27日(火)　下妻物語－２回目

映画を２回観て、原作（嶽本野ばら　小学館文庫）を読んだ。私の趣味では映画の方が良かった。

映画は、前半は原作に忠実だが、後半だいぶ変えてある。一番重要な違いは、桃子が「ケジメをつける」ために呼び出されたイチゴを助けに行く場面で、映画では桃子はその時 BABY,THE STARS SHINE BRIGHT（ロリータファッションのメゾン）の社長に頼まれた初めての仕事の〆切に追われていた。桃子は社長に電話し、仕事が間に合わなくなってしまうが、どうしても友達い会わなくてはならない、と言う。社長はイチゴのことと察し、友達を大事にするように言う。そして、桃子は原チャでイチゴ救出に向かう。

原作では、この場面の前に桃子は BABY の最初の仕事を立派に仕上げ、次の仕事（それほど急が

ないもの）に取りかかっている。

何が違うかというと、映画では桃子は自分の神様である BABY の社長から頼まれた大事な仕事を放棄してイチゴを助けに行った。つまり自分にとって何よりも大事なものを友の為に犠牲にする決意をしたのだ。もっとも、結局間に合ったけれども。この時桃子はheroine（というか、イメージとしてはむしろheroなのだが）になる。

普通の人間が、従来の自分にとって大事な（世俗的な）価値を捨て、利己的でない価値のために（自分を滅ぼすかもしれない）献身的な行動を取るとき、人は感動する。それはヤクザ映画や戦争映画にあるような命のやり取りの場面に限らず、平和な日常でもあることだ。たとえば「クレーマー・クレーマー」でダスティン・ホフマンは子供を病院へ連れていくために大事な仕事に穴をあけてしまう（彼は離婚前はワーカホリックだった）。それを法廷で糾弾されたとき彼は仕事を捨てて子供を取ることを宣明する。その時彼は戦場の英雄に負けないくらい輝いていた。

「下妻物語」に戻ると、映画は原チャで走る桃子を「昭和残侠伝」や「網走番外地」でがまんの末敵の組に単身殴り込みをかける高倉健のようにheroicに描いている。桃子とイチゴの二人も「昭和残侠伝」の高倉健と池部良に重なり、昔輝いていた男の世界を今は美しい女の子が代わって表現しているごとくである。

もっとも、昔から藤純子の緋牡丹のお竜さんのようなheroineもいたのでめずらしい話ではないかもしれない。でも、従来のheroineは何らかの意味で男に支えられるところがあり、お竜さんにしろ高倉や鶴田浩二が恋愛感情も交えて助けていた。その意味では、桃子とイチゴの間には男はなく、男を入らせないような充足した世界がある。それは昔「男の世界」といった場合女が立ち入れない厳しい掟が支配する世界を意味したのに似ている。一見軟派なようでいて、桃子のロリータ哲学をはじめこの映画には姿勢を正さなければならないような硬波のメッセージがあふれている。

2004年8月9日(月)　下妻物語ー５回目

短期間に５回も観てしまった。

毎回新たな発見があり、好きな場面が変わったりする。初回は、桃子のレディース相手の立ち回りが気に入らなかった。桃子は最後までロリータであってほしかったのだ。しかし、２回目以降好きになり、やがて一番好きな場面になった。物語的にも重要な場面だ。

映画を一回観ただけで批評するのは難しい。前回「トロイ」について書いてから２チャンネルの

映画板を見たら、「トロイ」を何回も観てはまっている人も多いようだ。私ももう一度観れば印象が変わるかも知れない。観ないと思うが。

さて、「下妻物語」から一つの絵を選ぶとすれば、桃子が池（水たまり？）の中で立ちあがり、レディースの連中をにらみつけるところだ。桃子がバアチャンの原チャで牛久大仏の裏の墓地に現れてからこの場面までは多少の時間がある。イチゴを取り囲んでいるレディースの中に原チャで突っ込んだが振り落とされた桃子はまだロリータだ。それがイチゴとレディース対決を目の当たりに見て、イチゴが窮地に立つことで桃子はロリータからヤンキーに変身する。

レディースの一人に池の中に突き落とされ、起きあがったとき、桃子は変身し、表情は一変している。そして関西弁で啖呵を切る。仮面ライダーばりの変身劇だが、ロリータからヤンキーという振幅の大きさが衝撃的だ。また、この変身は外見だけではなく、内面の深いところでの変化も伴っている。桃子は、ロココの精神からは認められないみっともない行動を自らの意志でとることにしたのだ。ママチャリに乗るのがみっともないと駅まで３０分歩いた桃子が金属バットを振り回して暴れる。（友達、親、子供などは）自分にとっては社長、係長、飼育係や管理人と同じように単なる肩書きでしかない、と言う桃子が友達の為に闘う。

この変身をもたらしたのは、イチゴへの友情（愛情か？）で、それまで不器用に表現されたイチゴの思い（片思い？）に対する桃子の回答だった。

原作者の野ばら氏は、最初桃子を深田恭子が演ずることにイメージが違うと感じたそうだが、確かに原作では桃子は身長１５０cmとあり、深田とは違う。しかし、ヤンキーに変身してからの桃子を演じるとなると、深田は適役だろう。ロリータとヤンキーの両方ともが地ではないかと思わせる深田恭子は不思議な女優だ。

なにはともあれ、原作、脚本、演出、キャスティング、演技、音楽等々全てがそろった奇跡のような作品である。

2004年9月30日(木)　誰も知らない

退屈な映画だった。

観客は母親に置き去りにされた４人の子供の話だと知って来るのだろうから、映画は観客が予想している以上の内容を提供しなければならない。けなげに、また無邪気に生きていく子供たちを描くだけで皆が感動するわけではない。子供たちはとても自然で良かったが、それは公園で遊ぶ

子供を見ていることとあまり違いはなく、金を取って映画を見せる以上それでは足りない。とにかく２時間２１分の上映時間は長すぎる。あの内容だったら１時間あれば十分でその方が充実したものになっていたろう。途中でいらいらしてきて、誰か早く子供たちを保護して映画を終わらせてくれという気持ちになった。一つ一つのシーンが長すぎる。長いシーンがあってもいいが、メリハリがないので眠くなる。

ストーリーもきれいごとで気に入らない。元の実話はもっと悲惨なものだったようだ。それをこの映画はメルヘンのように描いているが、それも成功していない。長男明（カンヌで主演男優賞を取った柳楽優弥）を助けようとするいじめられっ子の女子中学生が援助交際（それもカラオケに付き合うだけという欺瞞的なもの）で手に入れた金を明は拒否する。でも一番下の妹ゆきが死んだとき、明はゆきに飛行機を見せてあげたいのであの金を「貸してくれ」と言う。なにか中途半端。

子供たちは電気、ガス、水道を止められても公園で水を調達し、トイレを借り、コンビニの店員から賞味期限切れの食料をもらう。大家はアパートを追い出そうとはしない。「シティ・オブ･ゴッド」（２００２年ブラジル）ではスラムを舞台に小学生が銃を持ち殺し合いをしていた。これは極端だとしても、「誰も知らない」のような状況におかれた子供は日本以外の国だったら犯罪で生計を立てていくだろう。この映画は日本という不思議な富める国でしかありえない出来事を描いている。子供たちは最後まで善良でカワイソウな存在であり、善と悪との葛藤も経験せず、観客が感情移入しやすい、捨てられたペットのように扱われている。もっとも、実話はそんなきれいごとではなかった。やはり無理がある。

2004年10月23日(土)　スウィングガールズ

「ウォーターボーイズ」が嫌いだったので、矢口監督作品は観るつもりはなかったのだが、評判が良かったので観てしまった。やはり好きになれなかった。

何がいやかというと、ストーリーもギャグもみなわざとらしいのだ。はじめから笑わせようとか泣かせようとかの意図が見えていてしらける。監督自ら脚本を書いているが、独り善がりだと思う。たとえば次の話はおかしい。以下ネタバレ。

鈴木友子たちのバンドは県の高校生対象の演奏コンクールに出場しようとビデオを添えて応募することになった。それを託された友子は、ビデオを郵送するのを忘れ、思い出した時は既に遅く先着順で出場校は決ってしまっていた。友子がそれを言い出せないでいる間、仲間はユニフォームを作り盛り上がっている。友子がその事実を打ち明けたのは会場へ向かう列車の中だった。

こんな話はないと思う。このような重大な事柄を隠しておくにはそれなりの理由が必要だ。単に気が弱いとかでは説明がつかない。友子は気が弱いどころか勝気で物怖じしない娘として性格設定されている。さらにバンドの仲間の誰も演奏会の主催者から返事が来たかを確認しないのもへんだ。

結局この事件は、１校が雪のため来られず出場を断念し、その代わりに友子たちのバンドが出られることになり、めでたしめでたしの結末となった。この解決法もあまりにも安易だ。安手のテレビドラマのようである。

黒澤明の名作のように何人かの脚本家が共同で執筆し、互いに相手を言い負かせてやろうという意気込みで取り組めばこのような欠点はなくなる。矢口監督は「アドレナリンドライブ」（９９）の脚本・監督をやっており、この作品は好きなので、なぜあのような自然な話を作れないのかと思ってしまう。興行的に成功しなければという思いが、レベルの低い観客に合わせた作品を作らせてしまうのだろうか。

2004年12月4日(土)　ハウルの動く城

宮崎駿はどうしてしまったのだろう。

絵はきれいだったし、音楽はよかったし、キムタク等の役者も頑張っていた。しかし、ストーリーが頭に入ってこない。

途中で眠くなってしまって聞き漏らしたところもあるかもしれないが、たとえば、誰が誰に対して何の為に戦争しているのか、ハウルは何故それに参加するのか、誰が誰に対して何故魔法をかけて、それはどうすれば解けるのか、何故ソフィーはハウルに恋したのか、何故城が動かなければならないのか、等々分からないところだらけだ。

主役であるはずの城にしても何故あのように巨大である必要があるのか分からない。内部の構造からすれば二階家ぐらいで十分だ。戦争は近代兵器を使って闘われるが、それと魔法の力関係が分からない。最後に魔法使いが戦争をやめさせることになるが、そんな簡単なことなのか。

「千と千尋」であれだけの世界を作り上げた宮崎の作品とは思えない。

昔黒澤明の「赤ひげ」（１９６５）を観たときのことを思い出す。観客は久々の黒澤の時代劇ということで「用心棒」や「椿三十郎」のような活劇を期待していた。私の前の席には肉体労働者

風のおっさんが坐っていたが、途中で席を立って出ていってしまった。

天才にも老いは来るのだ。まあ、黒澤は「赤ひげ」の後も傑作を作ったが、「用心棒」みたいな痛快な作品はもう観られなかった。

2004年12月11日(土)　ゴジラ

１２月８日の朝日新聞の天声人語に面白いことを書いていたので以下引用する。

９７年、映画「ゴジラ」のプロデューサー田中友幸氏が死去したとき、米オハイオ州の新聞に「追悼文」が出た。少年時代の「ゴジラ」をめぐる思い出をつづった記事だった。
６０年代前半の米国の地方都市でのことらしい。「ゴジラ」がテレビ放映される日、子供たちは近隣で一番いいテレビのある家に集まった。まだ白黒の時代だった。東京の街を破壊する怪獣のすさまじさに、子供たちは圧倒され「おい、見ろよ」と口々に言いながら見入ったという。
そのころ原爆や水爆を、子供たちは単に「爆弾」と言っていた。キューバやソ連の爆弾が配備されていることは知っていた。サイレンが鳴ると、机の下や地下室に隠れるように教えられていた。子供たちの間でゴジラは何者かを熱心に議論したが、あの怪獣は、まさにすべてを破壊しつくす「爆弾」だったのだと筆者は回顧する。（以下省略）

私は１９５７年の後半から１９６０年の前半まで父の仕事の都合でニューヨーク市のクイーンズ地区に住んでいた。多分１９５８年だったと思うがテレビで「ゴジラ」を観た。それは日本で公開された映画を解体してアレンジし、アメリカ人の特派員が東京で体験した出来事を描いた映画に作り直したものだった。それでも特撮の部分はフルに活用され迫力があった。別に高級住宅地ではなかったが、多分すべての家庭にテレビはあり、集まって観ることはなかった。次の朝小学校の教室ではこの映画の話で持ちきりだった。「東京は大変だったんだなー」と同情してくれる者もいたが、「アメリカだったら原爆があるからすぐやっつけられるさ」とうそぶくやつもいた。原爆のことはbombとかthe　bombではなくA-Bombと言っていたと記憶している。

サイレンが鳴って机の下に隠れる訓練はよくやった。キューバ危機の前だったが、戦争は身近なものと感じていた。

ゴジラについては、１９７６年にミシガン大学での勉強を終えてニューヨークで研修をしていた頃、マンハッタンの多分５番街だったと思うが、歩道に大きな足跡が描いてあった。巨大なスタンプを作ったやつがいたのだ。その足跡のなかにGodzilla was here と書いてあった。有名なんだなーと、ちょっとうれしく思った。

2005年9月5日(月)　NANA

矢沢あいの同名の漫画の映画化。同じ名前で同年齢の女の子の友情物語。というと「下妻物語」を思い浮かべるが、両作品は、外観は似ていても内容はかなり違っている。

「下妻物語」は、はじめて観たときと、２回目は印象が違っていたし、その後観るたびに新しい発見があり感動があった。とても深い作品なのだ。

「NANA」は通俗的な映画である。ストーリーはよくある話で、人物描写も類型的だ。では「世界の中心で、愛をさけぶ」のように観客は動員するがすぐ忘れられる（必ずそうなる）ような平凡な作品かというと、そうではない。通俗には洗練された通俗とそうでないものがある。同様なストーリー、似たキャスティングでも、何百本に一本は大傑作が生まれるヤクザ映画のように、通俗はあなどれない。

私は、この映画で何回も泣いてしまった。その感動は、「下妻物語」のように、異次元の世界（桃子の世界）に惹き込まれるめくるめくものではなく、慣れ親しんだ世界のありふれた出来事が心地よく自分の中の通俗性と共鳴するのだ。でも、通俗をこれだけ美しく描けるというのは並大抵のことではない。原作の力と監督の技量が合致し傑作が生まれたのだろう。それから、ナナ役の中島美嘉がいい。彼女が出ている「偶然にも最悪な少年」も観たが（これも面白かった）、演技というより地なのだろう。宮崎あおい（奈々役）のように高い演技力をもった人ではないかもしれないが、作品全体を自分の色に染めてしまえるような力がある。

唯一の欠陥は、松田龍平だ。かれはナナを魅了する男なのだから、美しくなければならない。しかし、どうしたことだろう、松田龍平には「御法度」でデビューした頃の美は微塵も感じられない。病気でもあるように、身体はたるんで顔はむくんでいる。

原作者の矢沢あいが映画のパンフレットの中で「個人的には、漫画を読んだことのない人に、感想を聞いてみたいですね」と言っていたが、私は漫画を読んだことがないが、映画をとても楽しく観て感動した。多分、漫画と同じ場面、セリフなんだろうと思うところが、琴線に触れた。

2005年9月19日(月)　NANA－２回目

映画を２回観て、漫画を４巻まで読んだ。

想像以上に漫画に忠実な映画で、いいと思ったセリフや言葉は皆漫画の中にあった。

大崎ナナの中島美嘉ははまり役で、他をもって替え難い。小松奈々（ハチ）の宮崎あおいは、ミスキャストという人もいるが、私は良いと思った。むしろ、宮崎の演技力があったから、あれだけ原作に近い人物像が描けたのではないか。宮崎もプロモーションDVDの中で言っていたが、ハチのような普通の女の子は演じにくいのかもしれない。ナナの視点が動かないのに対してハチの視点は揺れ動く。ささいなことで気分は天国と地獄の間を行ったり来たりし、自分が何を求めているのかも定かでない。そんな普通の女の子を宮崎あおいは等身大で演じている。ハチの普通さがあるから、ナナの個性が引き立つのだ。

この作品は、パンクロックや様々な都会的風景を映しているが、その本質は演歌的だ。男を追って、北国の女が東京に出ていく。女を動かす情念は意地と未練。徹底した個人主義者桃子、を描いた（こんな人物は日本映画にこれまでなかった）「下妻物語」とは１８０度違う映画なのかもしれない。

2005年10月3日(月)　NANA－３回目

新宿スカラ１の日曜日１４：４０の回。６２０席の劇場の前３列ぐらいを除いてほぼ満席。５週目にしては異例の盛況。

多くが女子中高校生。と無理やり連れてこられたという風情の彼氏。一見４０才以上の男はいない。勿論５８才で一人で来ているのは私だけだったろう。

東宝はこの映画のターゲットを若い女性に絞ったとのこと。それは見事に当たったのだが、そのターゲットに入っていない人が観に行って悪いことはない。例えば青春ものと銘打たれた映画を老人が観て感動したらおかしいだろうか。むしろ、青春の真っ只中にいる人よりもよく理解できるのではないか。

私は「ドラえもん」や「クレヨンしんちゃん」にも感動するが、それが変だとは思わない。青春ものについては、更に思い入れが深く、それは私に青春らしき思い出がないからかもしれない。「下妻物語」や「NANA」は、存在しなかった私の青春を擬似体験させてくれる。それにしても、何故女の子の話なのだろうか。多分私自身が、男の子の青春につきものの汗や泥のにおいが嫌いだからだろう。

「下妻物語」は、何人かに推奨し、あとで感謝された。「NANA」に付いてはまだあまり人と話し

ていないが、私の評論を読んで、意外といいかも、と思ったあなた。観たら感想をください。

2007年9月15日(土)　腑抜けども、悲しみの愛を見せろ

本谷有希子原作の映画。原作小説はたまたま読んでいたのだが、気に入らなくて、映画を観る気は無かった。でも、映画評がいいので観てもいいかなと思った。そろそろ上映が終わるという一昨日、渋谷シネパレスのレイトショーでやっと観た。

つまらない原作でも素晴らしい映画が出来るということを発見した。

原作の何が気に入らないかというと、リアリティーが欠けていると思ったのだ。私は、SFやファンタジーが好きなので、荒唐無稽なものが嫌いなわけではない。しかし、舞台が火星であれ竜宮城であれ、人間の行動には一定の法則がある。それを逸脱する行動を描くときは説明が必要だ。

この作品には、女優になりたいが挫折するジコチューで傲慢な姉とその姉の生を赤裸々に描いた漫画で成功するMだが本当は残酷な妹が登場する。二人の葛藤のエピソードの中に、姉が自分を売り込もうとある映画監督に手紙を出したが、郵便局でバイトをしている妹がその手紙を手に入れ、映画監督になりすまして返事を書くというものがある。姉は監督と文通していると信じて、自分がスターへの道を歩んでいると錯覚する。

こんな話を信じろと言っても無理だろう。ずっと田舎に住んでいる１８才の少女が、映画監督のふりが出来るか。それも、だます相手が、成功していないにしろ東京の映画業界の表も裏も知っている女なのだ。こんなウソを書かれると腹が立つ。

では、映画はこれをどう処理したか。妹は漫画雑誌の大賞を受賞して東京に出て行くその日に、姉が監督に出したつもりの手紙の封筒を見せる。そこで姉は何が起きたかを悟る。それ以上の説明はない。

小説であれば、読者はここで本を置いて、そんなことが可能かと考える。しかし、映画はそのような勝手を観客に許さず、すぐ次の場面に移っていく。展開が速いのだ。この作品の監督吉田大八は、小説の欠陥を一瞬の映像に閉じ込めている。

文章も然りだ。下手な文章も映画になれば消えてしまう。上手い演技があれば、多少難のあるセリフも気にならない。物語の筋に無理があってもゆるせてしまう。この映画の役者は主役の佐藤江梨子をはじめみな熱演している。サトエリは地で行っているのではないかと思えるほどはまっ

ている。

撮影監督は「下妻物語」と同じ人で、山の中の田舎の風景がきれいだった。内容が強烈なので何回も観たいとは思わないが、忘れられない映画の一つになるだろう。

2008年4月12日(土)　接吻

小池栄子と豊川悦司共演。理由なく一家三人を殺した男とその男に恋をした女が獄中結婚する。

その動機については、映画は社会から疎外された二人が共感して結びつくと説明するが、ネットを見てこれが池田小学校の児童８人殺戮犯宅間守をモデルにしていることを知り別な印象を持つようになった。

宅間守には複数の恋愛感情を抱く支援者がいてその一人と獄中結婚した。彼は事件を起こす前４回結婚していたので５回目の結婚になる。彼には女性を惹きつける何かがあったと言わざるを得ない。

昨今の女性に、付き合いたい男の条件を挙げてくれと言えば、必ず「優しい人」が入ってくる。間違っても、凶暴な人とは言わない。しかし、優しさが男を選ぶ条件になったのは近代以降、つまりここ２００年かそこらのことではないか。人類の歴史は３００万年以上になるからそのほとんどの時期優しさではない条件が支配してたはずだ。

野獣や敵対する部族から妻や子供を守るには優しさより凶暴さの方が役立つ。女のDNAにはその時代の記憶が刻み込まれているに違いない。最近のDV事件を見ると何故そのような男を選ぶのか、何故逃げないのかと不思議になることがある。ヤクザでもなければ現代社会で凶暴さは生活していくには不必要なものだが、むしろ打算的でない純粋な女性がそのような時代錯誤な資質に惹かれるようだ。

グループダイナミックスの本で読んだ記憶があるが、優れた能力を持つマウスは狭い空間に多数のマウスと一緒に閉じ込められると犯罪者マウスになると。現代の閉塞的な社会は犯罪者を生み出しているのかもしれない。

宅間守は戦国時代に生まれていたら立派な武将になっていたかもしれない。織田信長は現代に生まれていたら宅間以上の犯罪者になっていたかもしれない。

2008年11月11日(火)　ブリュレ

昨日夜９時以降が空いたので映画を観ようと渋谷で探した。最近レイトが少なくこの映画しか適当なのが無かった。全く知らない作品なのでネットで調べたら、監督でこの映画がデビュー作である３２歳の林田賢太氏が１１月１日に亡くなったことを知った。

監督死去のためか映画館は混んでいた。普通このような無名の監督、役者の映画のレイトショーは数人しか観客はいない。

双子の姉妹、日名子と水那子の愛と別れを美しい自然を背景に描く。日名子には放火癖があり水那子は悪性の脳腫瘍で余命幾ばくもない。いわゆる難病ものになりやすい設定だが、感情は抑えられ、死は避けられないものとして受け入れられる。たびたび起こる火災と冬の荒々しい海が運命の過酷さを表現している。

水那子は「生まれ変わって日名子の子供になりたい」と言う。「日名子におんぶされ抱っこされたくさん抱きしめられたい」と言う。

現世では一緒になれない二人が来世では結ばれたいと思うのは自然なことだ。しかし来世があったとしても、そしてもう一度会えたとしても、やはり別れはやってくるだろう。水那子にとってのあらまほしき関係は母と赤子の関係だった。二人の間がもっとも緊密で一体となったその至福の時間が永遠に続くことを水那子は願ったのだろう。

このような来世は死に無限に近づいていく。赤子から羊水の中の胎児になり、やがて宇宙の中に溶け込んでいく。

林田監督の最初で最後の作品は、新人の初々しさと同時に年齢にそぐわない悟りも感じさせる。林田監督はあと５０年生きたら巨匠といわれるようになったかも知れない。でも５０年後の最後の作品はこの最初の作品に回帰してくるような気がする。

2009年3月31日(火)　ヤッターマン

２回観て希代の傑作だと思った。

１回目はアニメを知らなかったので分からないところもあった。でも、後を引く映画で、すぐに

また観たくなった。

２回目には、最初いいかげんに作られたように見えた部分もよく計算された結果だと分かった。役者だけでなく、美術、音楽、振り付け（特にダンス）など皆ベストの仕事をしていた。

興行収入が４週間連続トップだったようだが、これだけの大衆的な支持を得るためには、骨組みがしっかりしている必要がある。現実離れした設定だが、これは古典的な恋愛映画だと気づいた。

ヤッターマン１号、２号とドロンジョの三角関係、ボヤッキーのドロンジョへの片思い、それを気遣うトンズラーの友情。昨今の映画、小説と違い、感情は抑えられ、「がまん」が強調される。恋愛場面には、演歌調の音楽が使われ、レトロな空気がかもし出される。

恋愛感情は抑えられることで純化し、より激しくなる。エロスを表現するのは、人間に代わってヤッターワンやバージンローダーなどのキカイだ。連中は恥らうことなく情念をぶつけ合う。

恋愛劇の中心になるのはドロンジョで、ドロボーの神様までもドロンジョが好きであることが判明する。

ドロンジョは、奔放と神聖を併せ持った女で、神をも惹きつける魅力を有する。それでいて、夢は平凡な主婦になることなのだ。最初は意外と思われた深田恭子がはまり

2009年4月20日(月)　ハルフウェイ

北川悦束子監督、北乃きい、岡田将生主演。

キネ旬の４月下旬号で、映画評論家の江戸木氏が、「即興演技で映画を作ることの致命的な勘違い」、「映画における自然体とはきっちりと作りこむことで創造できるものだ」と言っている。

この映画のタイトルは、北乃きいが halfway を読み間違えた(演技ではなく）のをそのまま使っている。

私は、この映画が好きだが、多分フィクションというよりドキュメンタリーとして好きなのだろう。作られたセリフは何回も繰り返せるが、アドリブは一回きりだ。

北乃きいが halfway をハルフウェイと読み違えることは今後ないだろうから、あの場面は彼女の人生における唯一の瞬間を捉えたことになる。

即興演技による映画が傑作になることは稀であり、そのためにはストーリーの登場人物と役者が近似していて、役にはまり込んで現実の自分と区別がつかなくなるほどの状況が必要だろう。

映画における自然体がきっちりと作りこまれたものである必要があるかは、監督によって見解が異なると思う。黒澤明はそれを必要とし、大島渚は必要としないだろう。演技の新鮮さを重視する監督は作りこまれた完成度より勢いを取るようだ。

「ハルフウェイ」は演出を放棄しているようで、実際は手のひらの上で二人の若い役者を動かしているという、奇跡的な作品だ。

2009年4月21日(火)　演技と自然体

「ハルフウェイ」について書いていて考えたのだが、そもそも自然体の演技はありうるのだろうか。

自然体に見える演技はあるだろうが、それはあくまでも脚本家や演出家が作り上げたものだ。
では、ドキュメンタリーなら自然体が見られるかといえば、カメラの存在が邪魔になる。よくタレントの一人旅のテレビ番組があるが、自分でカメラを回していなければ、必ず二人以上の旅なのだ。

じゃあ、我々はカメラのないところで自然体かというと、そうとも言えない。他人に見られていると思えばその視線を意識して一人で演技する。他人がいない場合でも、もう一人の自分が自分を見ていることを感じる。自意識がある限り我々は演技し続ける。

たとえば、泣くという行為を考えてみれば、そこには色々な計算が働いていることが分かる。現実には純粋な感情など存在しない。仮にあったとしても、その感情を分析してみれば、利害打算などの夾雑物によって損なわれている。

そこで、本当の純粋な感情は演技によってのみ作り出せるという考えが生まれる。

「ハルフウェイ」で行われたのは、多分こんなことだったのだろう。

北乃きいに、あなたはシュウという同級生が大好きな女の子という役だ、そのシュウに告られ喜ぶが、シュウは東京の大学に行きたいという、と状況を説明する。その後は二人の自由に演技させる。

設定された「好きだ」という感情には理由はなく、分析することでその感情が消えることはない。ひたすら好きだと思えばいい。二人の将来のことを考える必要はない。映画の撮影の期間のみの関係なのだ。

このような舞台と役を与えられたら、夾雑物のない純粋な感情がはじけて、人物は自然に動き出す。

「ハルフウェイ」の中の北乃きいは現実の北乃きいより自然だったかもしれない。

2009年7月14日(火)　グラン・トリノ

クリント・イーストウッドの監督主演作。

ウォルトは、頑固な老人で健康を害している。息子たちや孫たちとは不仲だ。一人暮らしの家の周りは白人が引っ越して出て行き、隣にはモン族の一家が越してきた。最初は不快に思っていたウォルトだったが、やがて一家と親しくなる。その一家の姉弟を守るためにウォルトは身を挺する。

昔の東映ヤクザ映画を思い出したが、あまり感動しなかった。

ヤクザ映画のクライマックスが感動的になるのは、ヒーローがある価値のために他の価値を捨てるからだ。それは組のために女を捨てるというように義理と人情の関係で語られることが多い。

ウォルトの場合は、最初から人生に未練はなかった。むしろ自殺願望があるとさえ思える。無意味に死ぬことも出来ないと思っていたところに絶好の死に場所が用意された。だから彼の死には崇高さがない。

もう一つ感動を妨げるのは、ウォルトがモン族の一家と関わる理由が明確でないことだ。親しみを感じるようになったエピソードはあるが、人種差別主義者のウォルトが変身するだけのものか。

ヤクザ映画の場合は、ヒーローの行動は義務の履行でもある。それは組の責任ある立場というポ

ジションであったり、恩を受けた人に対する義理だったりする。「ごくせん」などもそのパターンを踏襲していて、やんくみが窮地に陥った生徒を救いに現れたときに言うセリフは「私はお前らを決して見捨てはしない。だって私はお前らの先生だから」。それは義務であり義理でもあるが、あたたかい感情に裏打ちされたもので「先生だから」は「母親だから」と似た響きがある。

「ごくせん」では、約束を守る、裏切らない、など信頼に基づく価値が熱く語られる。ヤクザの組とか、学校とか、緊密な人間関係が予想される社会における物語であれば、信頼が献身的な行動を引き起こすというストーリーが可能だ。「グラン・トリノ」はそれを異民族間で描こうとしたので無理があった。

2009年8月18日(火)　意志の勝利

渋谷のシアターNのレイトで観た。

レニ・リーフェンシュタール監督作品で、１９３４年のナチ党の全国大会の記録映画。

先ず、ヒトラーの映像や声をこれだけたくさん集めたものは今まで接したことがなかったので堪能した。間違いなく２０世紀最高のスターだ。この映画自体彼のプロモーション映画のようだ。

映画は７０年を経ても迫力があり、鳥肌が立つ。CGの映像による群集場面はたくさん見たが、この映画の白黒で表されたアリのような群集にはどれもかなわない。

映画以前に党大会の演出がすごい。隊列を作った無数のナチ党員によって地表に描かれる直線で構成された図形と、その上に聳え立つカギ十字のバナー。天に突き刺さるようなサーチライトの光の束。

ヒトラーが側近二人と二つの巨大な長方形の黒い人の塊に挟まれた真っ白な道を献花のためにゆっくりと歩く。それをカメラははるか上方から延々と映していく。豆粒のような三人の姿を、近づくことをせず、映し続ける。その真ん中がヒトラーなのだが、それまで多用したクローズアップを使わず、なにかヒトラーでさえも大きな歴史の流れの中では黒い点でしかないと言っているようだった。

総じて言えば、とても危険で魅力的な作品だ。独裁者は権力が作るものではなく、民衆が作るものだということがわかる。その歓喜は麻薬的で、必ず繰り返される。

2009年10月1日(木)　「南極料理人」と「のんちゃんのり弁」

何れも食をテーマにした映画。圧倒的に「南極料理人」の料理の方が美味そうに見えた。

どちらも大事件がおきるわけではなく、日常の小さな出来事を描いている。しかし、その日常が全く違う。「南極」は零下７０度の、風邪のウィルスまで絶滅してしまう世界だ。そのような極限の状況で仕事をする男たちにとって食事は我々が考えている以上に重要だ。

「南極」に登場した料理のなかでも、持って行ったラーメンがなくなったとき、乾水（炭酸ナトリウム入りの水）を作るところから始めたラーメンがやたら美味しそうだった。多分私が観た映画の中の料理で一二を争う。もう一つ挙げるとすれば「刑務所の中」に出てきた、特別な日に出されるアジフライか。

「南極」と「刑務所」は腹がへったからちょっと外食するとかコンビニに行くとか出来ないところが似ている。そういう状況での食事は想像を絶する価値を持つのだろう。

グルメ本やテレビの番組で料理の味を比較して優劣を付けたりしているが、味は相対的なもので、食事の環境や本人の身体の状況で大きく変わる。最近やっとそれが分かったので、一回だけ食べてまずいと思ったものには断定的な評価をしないようにしている。もっとも、そのような料理をもう一回食べに行くかは分からないが。